

第三十四卷 第八・九號 昭和二十二年六月一日 每月一回 發行 昭和二十二年五月二十五日印刷

荻原井泉水主宰

了圓日雨云

夏季號



才

荻原井泉水著（隨筆集）

京洛春秋 送共十八圓

荻原井泉水筆

白筆句帖 各冊 四五〇圓

一、鴨川帖（祇園の夜をうたふ）

二、月光帖（月の句とりく十三）

三、淺春帖（伊豆の湯にての作）

これは印刷の複製でなく墨の香も新しい肉筆の畫帖
風。和紙和綴の美本、桐箱入（箱書付）

吉井勇筆

白筆歌集 各冊 四五〇圓

一、祇園抄（祇園なつかしき秀歌）

二、清閑抄（清貧に閑居する最近の作）

三、旅情抄（旅に關する歌をつづる）

いづれも自筆桐箱入、一葉々々鑑賞にたへる秀れた

美術品

分買自由・御送金次第書留にて送ります。

京都市京大北門前

白井書房

振替京都九二三番

ほこり

私の住む山ノ内といふところは、鎌倉大船を通ずる街道である。今日でも昔風のわら屋があつて、ところ／＼の生垣にはもくげがよく咲いてゐる。そしてトラックや、ジブなどの交通が多いので、此の道はほこりがたちがちである。私はいつても、この道を通りながら思ふことは、もくげの葉にはどれも、ほこりが白くつもつてゐるのに、もくげの花には一こりにほこりが目立たない。これはどういふ譯だらうかといふことである。

もつとも、その譯をふかくつきつめようと考へたのでもなく、又、これは單なる印象にすぎないのであるが、今日はふと思ひあたつたことがあつて、さうだ、解つたといふ氣がしたのである。それは――

もくげの葉はいつもかはらないで其の枝に付いてゐるものだが、もくげの花は毎日々々新しく咲くものだからではないか。

夏王の湯盤の銘に――「日々新ニシテ日ニ又新ナリ」とある。人の心といふものも、日に新たなることがかんじんである。日に新たなるものは、ほこりによごれるひまがないのである。

――井泉水――

層

雲

第三十四卷

第八・九號

通卷第四〇四・五號

たのしみ

萩原 井泉水

馬上ニシテ少年過グ。世平ラカニシテ白髮多シ。殘軀ハ天ノ赦
ストコロ。樂シマズシテ是レ如何。

此の詩は伊達政宗である。この政宗の心境はよくわかる。そして私は大に同感する。私達の學生時代はみな、まじめに勉強したものだ、今日の青年が青春をたのしむなどといふ、さうした享樂からは遠かつた。ノートの整理と辭書を書くことの中に青年時代はすぎた。學校を出てから二三年して、私は「層雲」の發行をはじめた。雑誌の經營といふことは、私のガラにもない爲であらうか、それは最初からかなりの困難だつた、それを私のイジといふか、三十年あまりもつゞけてきた。又、私の主張する自由律俳句といふものは、甚だせまい道であつて、多くの人を誘ふことが出来なればかりか、世間からは俳句の異端邪道として反感を受ける「いはらの道」だつた。それを私はひたむきにかき分けて進んできた。そうして、今日ではとにかく、自由律俳句は俳句であるといふことだ

けは、世間一般にみとめさせる所まで到達したのである。この間の苦勞は、自分だけが知る、他の人のちよつと想像出来ないものである。この事を回想すると共に、私は自分のびんぼう、既に白く、よはひ既に六十をこえてしまつたことをしみじみと嘆息せざるをえないのである。そこで、餘生は果していくばくあるか、それはわからなけれども、此の餘生こそ、ほんとうの「餘り物」であつて、天が自分に與へてくれたもの——ゴホウビとして與へてくれたかどうかそれはわからないが——とにかく、天が私に與へてくれたものとして、頂戴してもいふものだと思へる。ほんとうに「ありがたく、いたゞく」といふ氣持である。せいじく、これからは此の餘生を樂しまうではないか、これを樂しまずしてどうするといふのか——こはいふ氣持なのである。

ところで、私のこの「ひとりごと」を聞いた人は腹を立て、云はれるかもしれない。「君がいまさら、これから樂しまうなぞいふのはゼイタクのさたではないか、君はこれまでも自分の好きな俳句の道を生活としてゐたのだから、これすなはち、既に樂しみではないか。われ／＼サラレイマンのごとき、何の面白みもない會社へたゞパンの爲につとめてゐる者はどう自分をなぐさめたらばいゝのか」——と云ふかもしれない。

いちいち、ごもつとも千萬である。そこで、もう一度よく／＼考へ直してみるならば、ひとから見れば「たのしみ」であるべきこと

をじぶんとして「たのしみ」とは感ぜずして、むしろ「くるしみ」と感じてゐたといふことに、私の心得ちがひがあつたわけである。

早い談が、私は世間に對して自由律俳句を主張する、世間では其をこばもうとすることは解つてゐるので、さういう反對をおしのけて自分の言葉をきかせようと努力する、決して横車をおそうといふわけではないが、坂道に車をおし上げようとするのだ。決して無理ではないが、汗しづくの氣持だ。誰もあとおしをする者もない、さきづなを引いてくれるものもない。自分一人がりきんでゐるのだ、だから「くるしい」のである。然し、これはやはり自分の心得ちがひだと云うべきだらう。自由律俳句というものゝ道が、正しい主張であるならば、それをわかひひろめようとしなくとも、いつかは必ず世に認められ、しぜんとひろまる時がくる。私の一代のうちに其をするにはあたらなない。自分はたゞ、その土をたがやし、そこに種をまいておけばいい。花をさかせ、實をならせて、自分で満足しようとして「よく」をおこしたところに、自分の「わたくしごころ」がある。この心こそ、自分をして「くるし」と感ぜしめたのである。この「わたくしごころ」といふものが心得ちがひだつたのである。

こう考へ直してみると、伊達政宗のやうに「樂シマズシテ是レ如何」と、これから大にたのしまうぜと云つて、樂しむことを目的として勤くにもあたらなない。元來、人間の小さい努力なんぞに依つて事の成就したことは一つもないのだ。すべては天の意志である。樂

しいことばかりか、苦しいと思ふことでも、何のことでも、とにかく自分が其を爲ることが出来たのは、すべて「天ノ赦ストコロ」に外ならない。この「天」の意といふことをほんとうに感じて、一切の「私」といふものをすてゝみたならば、爲ること成すこと、悉くが自然であつて、その自然にしたがつてする事は、すべて「たのしさ」として感ぜられるに違ひないのである。

そこで、私は今さらながら、芭蕉の言葉を想ひおこして、やはり芭蕉はえらかつたと思ふのである。その言葉は――

予が風流は夏爐、冬扇のごとし、衆にさかひて用ふるところなし。

自由律俳句といふものも亦「夏の爐」や「冬の扇」のごときものである。定型俳句の人達がいろりにあたつて好い氣持である時に、「いかゞです、扇があります」とすゝめるようなことは今後、私は一切しないこととする。たゞ、自分ひとりで扇をつかひたい時に扇をつかつてをればよろしい。冬の日、扇をつかふことのある、さういふ時の「たのしさ」は知る人ぞ知る、これは決して「ひとりよがり」でもなく、アマノジャクでもない。ひとり「ほゝえみ」であることこのたのしさである。かつは、遠くの僻地にある誰かゞ共鳴してゐることを感ずる、そのたのしさである。或は、後の世の誰かゞ必ず共鳴することを思ふことこのたのしさである。

麗日壇

井泉 水選

近木黎々火

月がくもつてふと照つてきて、石
こしのかつけ、て石が月夜
家のもつ影を出てゆく
うしろから道がおりにくる坂をおりる
海にゐるわが足の足うら
雨のあとと秋が月になる
とほしき日に日をあててをる
巖や月のうみはまんまん
月はまた雲を出て月のあかるい海の巖
いまはくくるしみのないおかほの布
秋の日暑い棺と人を焼く薪と二臺のくるまで
淡い幸福感が周囲が明るくなるとスクリーンの白
木の葉に木の葉のふる木の椅子
月が落葉するのでもボスト
山の中ここに岐れてゆく路のさらに茂り
とんぼゆきかひあそぶさま稲田はしり穂
逢へばこのごろ百姓だといふ手をみせて話す
けふもいちにち晴れて山暮れてゆく山のふるさと

田中井夢

秋山秋紅蓼

可否の後

井泉 水

コーヒイを自分でわかして、その芳香一
碗をたのしんだ後に、さて、此の麗日壇の
下に、豫定されてゐる十ページほどの原稿
を書こうとして、まづ、何と題しようかと
考へた末に……どうも文章の題といふもの
は、私一人にしても、この四十年來何千と
いふ文章をかいて、よくまア題の名に行き
づまらなかつたものだ、と思ふくらい、題
の名には、新しい案は大抵、出きつてゐる
だらうと思ふ中に……「可否の後」とはチ
ョツとかわつてゐるよう、と思ふのも、これは
いさゝか説明を要する。明治の初年ごろ、日
本にはじめてコーヒイがゆにうされた頃、
それは「可否」(カーヒイ)とかいたもの
だ。上野御成道には「可否茶館」といふ店
も出来たものだ。それで、この題は「コー
ヒイの後」といふことなのである。——な
ど、自分から註釋をつけてかゝるのも「を
こがましさ」の骨頂といふものだらうと、
まづことわつて、さて本題に入る。

リンゴ手にして青く君にすすめて赤く話すことつきず
野の花散つては咲いてのみ古里に立つ
山にふり川にふる雨の渡し舟一つさう
もみづるちよつとした島へ耕しにきとる舟であつて
秋空、魚がつういつういあそんでとうめい

飯尾青城子

朝が夕べのやうな陽ざし壁の吊し柿山ふかく住み
ふるい町のふと木犀のさびしいにほひが嵐のあと
手袋の指のかづ兩方の手の指のかづ子供
拾うて石ころのぬくみお地蔵さまお首がない
月の下をすぎると雲のしづかにはなれてゆく
一鳥飛ばず、雪へながれてゐる雪をうつつして

池田詩外樓

トタン屋根のへしやげたのがそここ雑草月を出すところ
桔梗二三輪あたり草とつて掃いてあるなどお盆あさのうち
かどべ稲が花つけそめて早いゆうはんたべてをるはだか
晝顔、日がへりの墓参にきて汽車から降りてあるく
つれて注射してきて日中のかぜ家々かどの畑
こほろぎこのごろめしどきの皿のいもの葉いもの莖

井上充夫

川ふしん細いはだかも一ぶくしてゐる遠くに山
内と外と蠅であつてがらす戸のがらす
竹が竹の皮ぬぐ空
きりぎりす鳴くお墓に手を合はしてそして歸る
大文字消えてしまふと黒い山が黒い空の中
ふつか晴れていちにち雨となるこの頃の給を着る

林木衣樓

朝日も早くなつて朝早い母が梅にせんたく
窓はしづかにわづらうてゐる人とは見えて梅のさかり

このごろ、俳句界では「第二藝術論」といふものが、諸方で話題の花をさかしてゐるらしい。事のおこりは、岩波書店發行の「世界」去年の十一月號に、桑原武夫といふ人が「第二藝術」といふ小論をかいたことからはじまる。その論の要點は、俳句といふものは嚴密に云つて「藝術」と稱すべきものではない。一つの「藝」であるにすぎない。強て「藝術」といひたければ、「第二藝術」といつたらば好かるうといふのである。それを新聞の文藝欄でも取りあげて、これは俳壇に對するバクダンだといふ風に云つて、けしかけたものだから、平生から口うるさい俳句界では、ケン／＼とウ／＼とさわぎはじめたのである。

私から見ると——「第二藝術か」なるものを一讀してみたが——これはそんなに騒ぎ立てるようなことでもあるまいと思ふ。だが、こうした「一石」が投じられることは、むしろケッコウではないかと思ふ。これは「他山の石」といふほどの、尊敬すべき「石」では斷じてない。然し、子供がタヅラにほうりなげたやうな、キマグレの石でもない。論者は、たしかに、ネラヒをつけて、ピシヤリとやつたつものりの石であ

冬空は縣廳の屋根の御紋章まだ夕明りある雲

船木月々虹

ゆふべくもの色、糸巻に糸巻き終へて姉妹

雪道あるいてきてうるはしき夕べを驛について四五人

小鳥の卵がかへりそらなおぼろ月夜の林をみち

朝は朝日うけて玄關はたごやの客が出て行く

焼跡にパンクなほしが炎天のちよつとした日かげ

またバスが通るやうになつたデープが追ひこして行く波

屋根まで昇つてきてさく黄色い花の二階戦災者

炎天の草を猫が食べべてる、か

草 草 へ 風 の 月 かげ

人の居ない工場と泳いでる子供たち

白壁のよごれたままの農村豊作

春の日がさせば村の人々ぼけの花紅い

川原へ笠かりて來てゐるきりぎりす

いきでゐる月の夜の虫のよるにをる

迎火にきみ焼いてきみのはねる幼なし

ものうく迎火の消えのこりをるへ寄り來たり

玉子の重みもつやも早春癒えてゐる

夏は暑いのがよくて月夜はすずしい

石白いしが粉ナこぼして涼しい

萩散るとついでに來てとんでいつた雀の子

枝から落ちた雪のはれはれと鶏の生んだこゑ

ついてゐる白の古ききねの軽さ、夕べすずしい

雨がはれて山の林はきり立ちて障子しめてゐる

雌花に雄花も咲いてはるる畑の雨の日

淨心寺 惇

内島 北琅

佐々木 石々

酒井 仙醉樓

杉田 作郎

原 蝦煎子

古林 巴水樓

る。たとへば、古池の中にある蛙をめぐけて投げつけたツブテのやうなものである。

その蛙は水の中にもぐつてしまつて、少しもケガをしてはゐない。だが、水面には石の跡がひろがつて時ならぬ波紋を立てゝ

ゐる。こうした石でも投げられなければ、古池の水はいつまでも、さざなみさへも立

てずに、くさりきつてゐたかと思ふと、このやうな一つの石つぶても、ネムケザマシ

としてたしかに有效である。

層雲の人でもふるい時代のこととは知る人が少いであらうが、層雲の第二巻(大正二年ごろ)に私は「蛇の言葉」といふものを

書いた。それは、この題でも示唆してゐるやうに、かなり「毒舌」であつて、俳壇と

いふものを全面的に否定した言葉だつた。

俳壇は古いものと口をしめた泥貝のやうに安心して、その沼が端から埋められて

ゆくのを知らぬ俳壇の人々。

新しい意味で芭蕉の研究がはじまれば新しい意味での芭蕉のメッキもはじまる。

俳味を探るより、まづ俳臭を知るべし。

こんな風の毒舌を吐いたこともある。これが今から三十三四年前のことである。だから、私は「第二藝術論」の論者が吐いた

少女本を見ながらゆく明るい朝の櫻落葉
まくそばからはえてゆくので月夜がつづく

一色如佛

雨音が水音になる月夜になる
やつぱりひとりがいふうりんはかぜがならす
むらぢうがつきよのおまつり

東松八洲雄

月が山をくらくしてゐる港の灯に錨を下す
牛をひく女の手甲もかすりの、夏の雨は夢のような
さらりと梅にも雪の豆炭の配給です

小林銀汀

夕べ虹を見てゐるは焼け残つた椅子にこども
焼けたあとに住み茄子が露ばみ郵便がくる
水が疾き水を追うて走り吹雪の中

高橋良太郎

雪がこんこんふる焼け出された子供と村の子供
なるほど雪のきえがてのゆき虫とんでゐる
花満開雨の手目にあてて泣いてゐる

柳田流矢

雪のうへうすつぺらなかれひならべてこれも闇市
月あかりしてうしろより木蓮しろきひらきかけて枝に
賀蕤といふすずしくおのおの一握りの米もつて集り

財馬阿歩

桑の實の甘き匂ひの雨をはらして通る
どこでくらすも同じことの螢かごかけておく
梅干のいろに手を染めて涼しいといふ風がくる

すすめても醫者へは行かぬといふ妻と、秋の蚊
あるもので事足して今日を降る秋の雨かな
秋雨、石が臼になつてゆく
雲のいろ夕べのいろの山は松山
雲を出た月の草にしよるべん

やうな毒言にも少しもおどろかない。

その後、私は「中央公論」に「俳壇を焼
き拂へ」といふ文章をかいたことがある。

これもこの題の示すごとく、かなりガゲキ
の言説だつた。私はその一文の中で、世間
の俳句は「交際文學」である、俳句の教へ
るところは「好き作法(サホウ)」であるに
すぎないと極論した。そして、ラッセルの
言を引用して、

よき作法の弊害の源たる一つは、それ自
身を、全く正しいものと信ずることであ
る。作法の價値を信じすぎる事は、それ
自身、精神的進歩を破壊するに充分であ
る……よき作法はそれ自身「死」であり
「生長不能」である。……よき作法の興
へた害毒は、實にはかり知るべからざる
ものがある。

交際文學としての俳句は「よき作法」の
如き修練を以て、俳句の勉強と考へてゐる
のだ。「——それ故に私は云ふ、現今の俳
句界を焼き拂へ、生命の穗が枯れていたず
らにザワ／＼と騒いでゐる古い草を焼き拂
へ」と結んでおいた。これは、大正九年、
(今から廿七年前)のことである。だから
私は「第二藝術論」の論者の俳句否定論に

松尾敦之

堀英之助

ひでりの月がかたぶく山の池のいしがき
つきのひかりちちをかくすとしごろになつてゐる
ひつこしの車についてゆく私が青田のとある村の床屋の鏡
生きのこつたものどうし行きあうてゐる夏草の中
このへん夕立したらしい蟹が町なか里いも畑け
海もあんずの花もくれおそくて机にともし
みづすましあけきらぬうちふりだしてゐる
秋、遠い昔のやうな音が石臼は妻の挽く
學童一列につづく曼珠沙華一列に秋
空へあげてあるめざしに日和かたまつてゐる
交番は巡査がきちんと椅子にゐるラヂオが秋の日の五時
雲を抜けると月がちか道、その先

橋本夢道

萩の桔梗の香亦紅の昏れないうちに着く
唐辛子青くて辛くてどうにかはなつてゆくくらし
月はたえがたくゆたかに髪をてらしてゐる
炎天の中の木の影に會つて戀の身をおく
そのようにして秘めごとの化粧なほしてゐる風鈴
虹の輪のなかでいそぐ女と會うて別れてゆく
炎天つづきの乾草のほふ星ぞら
汲めばこぼるる音のすずしい水は深くにある
炎天の光へ水をさげでゆく
新月の、一と雨すきしは松
十六夜ははぎとすすきと少し暗い花屋の店内
御山する人のものごし冬めいて鳥居のある道
月があれば葉をおとす木のあつて、池

小谷信夫

は少しもおどろかない。三十年前の私であつたらば、此の論者の言に私は双手をあげて、賛成したにちがひないのである。

いや、今日でも……である。此の論者が「俳句」といふ語を使つてゐる。其の上に「定型」といふ語を加へて「定型俳句」として、これを讀み直したならば「定型俳句は第二藝術なり」といふ論には、大體、私として同意出来るのである。

x

一般文學論のごく初歩な考から考へても文學に或る對象（即ち季節といふもの）をかぎつて、この範圍の内に於て作れ、これ以外のことにふれてはならぬといふやうなそんな純文學があるものだろうか——又、詩にリズムがなければならぬことは當然だが、リズムではなくて、字數といふものゝ上でこれを規定して、この字數のワクにはめて作る以外に作つてはならぬといふやうな、そんな純文學があるものだろうか。「定型俳句」といふものは正しい意味の藝術でも文學でもありえない。——此事は、私が何十年來、啓蒙的に、口がスツパクなるほど説いた事であつて、此の事も「定型俳句は第二藝術なり」といふ表現をもつて説い

冬の夜一ぱいの山羊の乳ぬくし
蝶々石段のぼつてくる山茶花のさやけき日
雪がやむと風の夜になる焚口の火吹竹
しかつた子の手に花をもたせる

木戸夢郎

秋 白 し 干 草 の 匂 ひ
牛車が遠くへ往つてしまつたその音の秋
ここに草が月夜となり白う咲く
一ときは路傍の石にさうして月は落ちた
秋 風、息はほそく吹いて火とする
たまごうんで來梅の木の下あるくにはとり
ひととき前まで鴉きいてゐた死顔
雨音、豆の煮えるまで起きてゐる
わらづか、子供達が行つてしまふとすずめが來てゐる
ハガキへはハガキを書き夕べはひよが來てなく
雀、月が影おこく葉のなかに入る
池が氷つてゐる鴈が枯枝折りに來てゐる
送つて出て、夫婦で二つ影つけてゆくつきよ
さいならさいならせんせいがついでゆかれる汽車だよ
ぼんやり江ノ島がある昔の寫眞の女學生だつた頃の奥さん
子供もつれてきてうちの墓ではない墓の桔梗おみなえし
夕べ雨の畑に一本桐の木のあるしづけさになる
ゆふべ鶯、子供が縁に出て習字してゐる
雪の上のうすいもやがはれてくると黄ろくしてみつまたの花
雪きえると青いその草も食べられるといふのです

木村綠平

三好草一

でもないものであらう。だが、私は今日、それをそのまゝ主唱しようとは思はない。なぜであるか。——私の主義主張に變化がおこつたのではない。私は俳句といふものをたゞ「藝術」か「非藝術」かといふ觀點よりも、少しちがつた、しひて云へば、少し深い觀點から考へるように、此の數年來は考へてきたからである。

それは、俳句といふものゝ本質の上に愛をもつたといつては、アマイ表現になるかもしれないが、これまでは自分の信ずる道をよしとするの餘り、自分の道と背反するものを憎むといふ位な氣持もあつたのは悪かつたといふことである。自分と反くものもまた自分のキョウダイではないか、同じ腹から出たものではないかといふやうな氣持である。悪いことはたしかに悪い、と理屈ではいへるが、憎めない、憎んではならないと氣持である。と云つて、たやすく其をゆるすのでもないが、先方にも一つ深くはいつても、ひ、自分も亦、少し廣い氣持になれば、お互に理解しあうことも出來ようし、それによつて、先方をしよ一歩も二歩も進んでもらうことが出來ようといふ氣持なのである。

山に暮の燈明ともるといひて遠くの山に
硝子に秋が来てをるモデル臺にのぼりて
家のまへ横ブリマスロツク二羽主人見せてをる
三日月やまのそら浸みでる水のひかりていわほ
巢箱横から陽ざしの働き蜂のはたらく
やさかの祭へつま子みなゆき花火音する
鯉の子賣りとみち連れ水あるところ憩ひてもゆく
すべつてころんでおかしくてそれから雪のみち
少年平地スキ―揃つて朝日をいそぐ
雪のおもてに果樹園、園主が日和でてをる
雑木山を仰げば雑木の末の碧空が冬
冬の碧空ただこのことなるやうなところ行く
瀬普たかく聞えて今宵雪のはれたる松の木
松の中は風の音の寒い道しばらく松の中
隅にわく水が蓮田の草もこの頃凍らないでゐる
着けばおりの前の鐵橋のたうとう雨が落ちてきて枯芦
雪 山明らかな川上も月夜となる
橋の人通りに風があがつてゐて元日
雪ふればつもれば池の池の中の石
木を挽く音の竹藪をへだて竹藪の雪
さつと障子に射してきて枯木の影のすぐ消えてしまふ、そんな日
石、つばぶきに日の曇れば
水田夜明けてくると空蓮田で蓮が枯れてゐる
月になつたばかりの月が、風が落ちると暮れてゐる
森をはなれて灯をもつ森の、月夜となる稻の穂

大越香亦紅

池原魚眠洞

何でもそうだが、或るものを、アタマからダメだとキメツケテしまつては、そのものはハンパツするだけで、いよく悪い方角へ進んで行つてしまおう。悪いものの中から、少しでもよくなるべきイトグチはなにかと考へ、それを引き出し、引き立てるといふことが本當の批評といふものだろうとおもふ。

ところで、此の「第二藝術論」の論者にはそういふ親切はもちろんないし、又、自分の批難するものに對して、も少し深くそれを理解してみよう、といふ考へさへもない。論者が門外漢であることはけつこうだが、門外漢的な立場を強調して、門外からドナツてゐる態度は、大人げないやうに思ふ。「かんで吐き出した」といふ言葉があるが、此の人の「かまらずにほきだした」のである。つまり「くわずぎらひ」なものを、ムリに食つてみて、ベツ／＼と云つた氣持である。だから、これを讀む者は、その論旨にうなづかせるより前に、こういふ一掃的な態度をもつては、正しい藝術論は出來まいといふ氣がする。又、此の論者は俳句十五六句（その中に自由律俳句が一つある）をあげて、この中には意味がてんで

山本木天蓼

水は低いところから汲んで月の出た石段
宿もするらしい鶏頭二三本と四五本と畑
ゆくに島のおまつりかへるに夏かげこのみち
月ののぼるほどに潮のみちるほどによ
波の音であり松風でありのりとごとと宣り終り
餌ばかりとる魚が見えてゐる
風になびく穂すすき刈りました一把と一把
大きな背負ひ袋せおつて蝸牛のやうな旅に出ます
家が二軒と一軒、田がつづき違山すこし紅葉す
花のないはぎに風呂けむらせて宿する
膳をさげると急須に湯呑二つだけの、月
話の中にはいるでもなく虫をきくでもなく
草のかけには花のやうな蟹がゐてうしほ
海か網をひく波になる所で曳く
風のあとの海の雲のひとところ夕日
松に吹く風が草にふく風山に吹く
雨が流れれる川さむい雨になる
朝早く流れてゐる水ともう散る葉
地べたで賣ることの赤いほづき女の子賣る
風が秋だなと云ひ人が去ぬと人が来る
本土決戦といふてゐたからすがないてゐる景色
栗が空で笑つてゐるのを石段を日に三度
富士驛の富士が冬はれて上り列車下り列車も満員
電車から月夜の海が光つてゐるほかは焼跡
空がすつかり乾いてしまつたひる月で

伊東・俊二

解らない句がある。自分の友人に見せても
やはり解らないと云つたと云ふが、その句
は句として善し悪しは別として、日本語に
一とほりの敏感をもつてゐるものならば、
決して「わからない」といふべき句ではな
い。この論者はよほど「語感」といふもの
にニブイあたまをもつた人ではないのだろ
うか。イヤ、此の人はフランスの詩のこと
をさかんに説き立てゝゐるから、此の人の
フランス語はきつと達者なのに違ひないが
日本語をフランス式に味つてゐるのではな
いだろうか、といふ氣がする。

×

一體、日本の文學といはず、日本の繪畫
にしても、西洋のものとは大そうちがつた
性格をもつてゐる。南畷といふものは宋時
代に發生したものが、日本にはいつてから
特殊の發達をしたもので、西洋の繪畫とは
いちじるしく理念を異にしてゐる。西洋畫
論では説明することが出来ない。日本の能
樂のごとき特殊のものは、なおさら西洋の
藝術論では説明が出来まい。外國の文學論
では、ジャンル論が公式的である。このジ
ヤナルといふ言葉がフランスだが、日本の
文學といふものはジャンル論では割りきれ

月夜 鹽のそばに下駄、行水いたたく
 鶏飼ふことも暮れそめて軒につるす義
 ひる顔咲かせてまだ歸らない留守をしてゐる
 あはの穂もきびの穂も月は十三夜
 佛さまへおいも洗つてゐる
 からたちのはなは月の明るい晩
 日盛り、白い鶏が巢箱に坐り靜かな
 濡れて月夜になる一人ゆき二人ならびゆく
 ちよつと寄らせて貰つてあついで茶の味
 本堂がらんとしてゐて鳴くだけのせみ鳴いてゐる
 先生お留守の水一二杯つめたい水いたたく
 白蓮の上には白雲、夏を籠り(シヤムにて)
 からすはかへる青田は雨の日もよろし
 月が出てすつかりはくれない箒とちりとり
 橋の向ふから眺めてその家の山ふところに道
 花が葉になりゆくに深まりゆく愛情
 すぐかへりますので火吹竹が黒くておばあさん
 踏躰の空明りにして黒い山の松五六本
 梅の二三輪、青竹割る人に語り寄り
 灯りてより春雨ひそけし松の葉
 マブをあげればさむい空があげてゐる松の木
 水あればみぞそばのこのあたり夕月
 灯とてもバラツクばかりバラリと月が霞
 ゆだちする山や川や草やふるさと
 菖蒲さくのが流に影を雨は上つてゐるよりな

森 窪 其 果
 木 村 丁 字
 前 川 紅 二
 芝 田 青 筋
 鈴 木 芋 村
 新 納 香 樹
 三 浦 香 女
 塚 田 虹 子
 木 庭 立 夫
 福 山 溪 水
 太 田 鐵 石
 村 上 二 丘
 長 山 林 二
 有 竹 四 郎
 畠 山 實 治
 日 向 野 千 一 路
 園 田 三 不 止

ないものだと思ふ。南畫といふものは
 多大の文學的要素をふくんでゐる。繪畫と
 文學とは全然そのジャンルを異にするもの
 だから、文學的な繪畫などいふものはナン
 センスであるやうだが、このところに西洋
 畫の及ぶこの出来ない、南畫の卓越したる
 境地といふものがある。これは西洋人には
 解らない。西洋風の考へをする日本人にも
 解らない。これに就て、私は年來、一つの
 腹案をもつてゐる。それは、西洋の文學論
 に依らない、「日本文學論」をかいてみた
 といふことである。

私の「日本文學論」はそれが書き上げら
 れた時にゾンブンを批判してもらひたいが
 その要旨を云ふと、日本の文學はそれと近
 親關係にある、繪畫や能樂や茶湯等と共に
 これを「道」とする所に精神をもつてゐる。
 「道」とするのだから「行ず」といふこと
 を離れてない。だから其を行じないものが
 その精神にふれることは出来ない。これが
 西洋の藝術と大そう違ふところである。繪
 畫の如きものは、誰が見ても、好し悪しの
 すぐにわかりやすいものであるが、大雅堂
 や蕪村の繪のよさといふものは、その繪の
 心を心とするものでなくては解らないので